

令和八年度夏季

全国大学国語国文学会 第一三三三回大会案内・要旨集

期日 六月十三日(土)・十四日(日)・十五日(月)

会場 日本大学文理学部キャンパス (対面とNoonによるハイブリッド大会)

〒一五六―八五五〇 東京都世田谷区桜上水三―二五―四〇

交通アクセス・京王線・東急世田谷線「下高井戸」徒歩約8分

京王線「桜上水」徒歩約8〜10分

令和八年度夏季

全国大学国語国文学会 第一二三三回大会（対面とオンライン〈Zoom〉によるハイブリッド大会）のご案内

○参加を希望される方は、本学会ホームページ (<https://zenkoku-sjll.org>) の「次回大会案内」のページにある参加申込フォームより、六月一日（月）までにお申し込みください。懇親会への参加も同フォームよりお申込みください。

○申し込まれた方には、申込締切後にメールにて参加情報をお伝えします。

○感染症の拡大状況等によっては、全面オンラインに変更となる場合があります。

○出張依頼のご依頼は、学会事務局・大会担当までご連絡ください。

（学会事務局）〒七〇〇―八五一六 岡山県岡山市北区伊福町二―一六―九

ノートルダム清心女子大学文学部 東城敏毅研究室内 全国大学国語国文学会事務局・大会担当

学会事務局メールアドレス office@zenkoku-sjll.org

○大会についてのお問い合わせは、下記アドレスまでご連絡ください。

大会用メールアドレス conf@zenkoku-sjll.org

第一日 6月13日（土）

代表委員会（11時～12時）

会場 3号館 3401教室

委員会（12時15分～12時45分）

会場 3号館 3401教室

会場 日本大学 文理学部キャンパス 図書館棟3F オーバル・ホール
受付 13時00分～（Zoom 開場 13時15分～）

開会 13時30分～

学会代表挨拶

会場校挨拶

明治大学教授

小野 正弘

日本大学文理学部長

岡 隆

大会シンポジウムテーマ

文献学の現在と未来

国文学研究においてデジタル・ヒューマニティーズの重要性が説かれるようになって久しい。それは、研究のさらなる発展および国文学研究を推進する研究基盤の拡張の可能性を持つものである。TEIを活用した古典籍のデジタル化は、まさにその一つと言いつつ、そうした最中であつてこそ、これまでの研究を振り返ることが求められるのではないか。

古典籍のデジタル化ということにあつて、その根本を支えるのは、これまでに原本資料に向き合ってきたことの知見である。その研究はいかなる方法で、何を明らかにし、いかに国文学の研究に与してきたのか。あるいは、伝本研究が進められたことで、一つの文学作品に対する研究がどれほどの広がりを持つものになったか。デジタル・ヒューマニティーズの時代において、それらの知見をつなぐことができるか。研究のデジタル化を支えるのは、まぎれもなくアナログな研究であるはずだ。また、デジタルの進展によって、すべてがデジタルに取って代わるのではなく、実物としての資料の価値をあらためて気づかせるものともなるだろう。各時代における原本資料に基づいた研究成果、その到達地点と現在地を共有し、きたるべきデジタル・ヒューマニティーズの時代と言う未来に向けた一歩としたい。

趣旨説明（13時45分～13時50分）

コーディネーター／司会 日本大学教授 袴田 光康

シンポジウム（13時50分～17時）

開かれた／拓いていく本文研究

日本大学教授 久保木秀夫

報告者は中古中世の和歌及び仮名散文に関する古典籍・古筆切の調査研究を専門としている。伝本・本文の調査に際してはデジタル機器・デジタル環境の活用が不可欠であり、「国書データベース」をはじめとする各種Webサイトを最大限に活用して原本資料の所在の把握等に努めてきた。と同時にデジタルカメラによる原本資料の撮影や画像の加工、古筆切データの蓄積、また古筆切の所収情報のデータベース（の元データ）の作成・公開や『日本文学Web図書館』への本文データ提供などを行ってきた。

本文校合に関しても、Web上で数多の原本資料のデジタル画像が公開されていることの恩恵は計り知れない。総じて本文研究とデジタル分野との相性は非常に良いという感触を得続けている。

そうした研究活動の経験に基づきつつ、本シンポジウムでは、原本資料のデジタル画像の閲覧によってどのようなことが分かるのか、どのようなことが可能となるのか、どのようなことがなお分からないのか、アナログだからこそ可能なことは何なのか、といったことについて、いくつかの具体例に基づきながら述べてみたい。また現在報告者はTEIガイドラインに基づく『和漢朗詠集』定家本のテキストデータを試作中であり、その過程で得られた知見などについても言及したい。

本報告を通じて、本文研究の基盤がどれだけ世に開かれているか、また本文研究をこれから先どのように切り拓いていくか、といった論点を浮かび上がらせ、デジタル・ヒューマニティーズの時代における本文研究の可能性について考えてみたい。

中本研究における封切紙という視座

筑波大学特任助教 松永 瑠成

インターネット上で公開されるデジタル画像の拡充により、文献調査の利便性は飛躍的に向上した。しかし、画像は閲覧者に均質な情報をもたらすとは限らない。実物の書籍に触れた経験や、原本に関する知見がなければ、画像上では情報として認識すらできないものもある。近世後期中本（滑稽本・人情本）にみられる封切紙は、その一例である。

封切紙とは「版本で、最初の数丁は披見できるようにして残し、以下の丁を後表紙の見返しの白紙と一続きの袋に作って封じ込み、その袋を切らなければ中を披見できぬようにしていた紙」である（『日本古典籍書誌学辞典』。中野三敏氏は「洒落本や滑稽本の小本・中本型のもの」の八割がたはこの封切紙を備えており、それらは原則「一冊モノに限って施されている」と指摘している（『書誌学談義 江戸の板本』）。このたび発表者の調査により、上下あるいは上中下など、複数巻から構成される滑稽本と人情本、すなわち中本の大半にも、封切紙やその痕跡が残されていることが明らかとなった。

江戸時代の貸本屋において、封切紙の備わる新刊は「封切」などと呼ばれて珍重され、特別に高額な見料が設定されていた。貸本屋の主力商品であった中本の大半に封切紙が備わっているという事実は、中本が制作の段階から、貸本屋によって購入され、貸し出されることを前提として作られていたことを示している。書籍の流通や受容のあり方が、その制作に直接的な影響を与えていた一例といえよう。このように封切紙の存在は、中本を考える上で重要な視座となり得るのである。

切り取られ、失われていることの多い封切紙だが、その痕跡は実物を見慣れた目であれば、画像上でも識別できる場合がある。アナログな原本研究の知見こそが、デジタル画像から新たな情報を引き出し、新しい視座、そして新しい研究の芽を生み出すという可能性の一端を提示したい。

ホノルル美術館所蔵『十番虫合絵巻』のデジタル公開について

京都産業大学教授 盛田 帝子

ホノルル美術館レイン文庫所蔵『十番虫合絵巻』は、天明二年（1782）八月に、江戸の隅田川のほとりの木母寺で行われた「十番虫合」という催しを、テキスト（和歌と判詞）と絵で記録した二軸の巻物である。本資料について、発表者が代表を務めた科研（JSPS JP20KK0006）チームとロバート・ヒューイ氏を中心とするハワイ大学マノア校とで国際共同研究を行い、オンライン輪読会の成果を『江戸の王朝文化復興』（文学通信、2024年）として出版するとともに、「十番虫合絵巻」のウェブサイト（<https://juban-mushiawase.dhi.jp/>）でも公開した。ウェブサイトでは、原本の画像・校訂本文・現代語訳・英訳、作品と参加した人々についての解説を掲載し、書籍ではこれに加えて注釈と論文・コラムを収録している。

本シンポジウムの趣旨に基づき、今回はウェブサイトで『十番虫合絵巻』を閲覧するための「虫合絵巻ビューワ」について紹介したい。「虫合絵巻ビューワ」は、『十番虫合絵巻』における様々な要素を記述した上で、虫合・歌合を理解しやすくする表示機能の提供を目指したものである。『十番虫合絵巻』のテキストデータの記述に際し、Unicodeに準拠して文字を正規化した上で、TEI（Text Encoding Initiative）ガイドラインに準拠したテキストの構造化を行っている。絵巻の画像はIIIFに準拠した仕様で公開した上で、TEI準拠テキストから参照できるようにしている。

「虫合絵巻ビューワ」によって、『十番虫合絵巻』の歌合と虫合の対戦を様々な角度から楽しむことができる。研究のみならず、古典教育にも活用でき、英訳を備えていることによって、英語圏の人々の利用も可能である。本発表では、ウェブサイトを使った授業の実践例を示して、デジタルデータ化したテキストと絵が連動し、現代語訳や英訳を校訂本文と同時に参照できる「十番虫合絵巻」ウェブサイトの意義について考えたい。なお、本ビューワについては、永崎研宣氏の「歌合絵巻テキスト構造化&IIIF画像連携の成果が公開されました」（[digitalnagasaki](https://digitalnagasaki.jp/)）のブログ（2024年3月30日）を参照していただきたい。

近年、文学研究を取り巻く環境は大きく変化している。大学や研究機関、国公立図書館、文学館、新聞社等によるデジタル化事業の進展により、書籍・雑誌の電子化や原資料画像へのオンラインアクセスが飛躍的に拡大した。高精細画像の公開や検索機能の整備は研究の利便性を高め、デジタル資料を用いた研究は今後さらに進展していくと考えられる。こうした環境は研究の深化のみならず普及の面でも意義を持つものであり、筆者自身も日々その恩恵を受けている。

しかしながら、デジタル研究環境の進展は、資料の可視性を高める一方で、従来の現物調査において把握されてきた情報の一部を見えにくくする側面も有している。本報告では、デジタル化がもたらす可視性と不可視性の両面について、近現代資料の調査事例をもとに検討する。

まず可視性の事例として取りあげるのが、昭和の喜劇俳優・古川ロッパ（1903-1961）が残した日記である。本人によって一部は焼却されたものの、昭和9年から昭和35年までの108冊に及ぶ日記が現存する。演劇、映画の活動や文化人との交遊、日常生活の詳細を記した貴重な資料であり、現在は全4冊の書籍として翻刻されているが、編集の過程で収録する日の取捨選択、部分的な削除、改変が行われている。本報告ではこうした削除箇所注目し、デジタル化によって原資料へのアクセスが可能となることで、本文の歪みやそれに伴う解釈が修正されうることを示す。

次に不可視性の事例として、明治・大正・昭和期に活躍した劇作家、小説家の真山青果（1878-1948）の執筆ノートを取りあげる。青果は既存の日記帳を再利用してノートとしているが、その中には本人によって閉じられたページ等があり、不可視の情報が含まれている。実地調査で気づいた観察を通して、デジタル画像では把握しきれない資料の側面を具体的に提示する。

以上の検討を通じて、デジタル研究環境における可視化の意義を確認するとともに、その限界と現物調査の必要性について考察する。

休憩（15時10分～15時30分）

コメント1

コメント2

文学通信編集部 岡田 圭介

文部科学省教科書調査官 幾浦 裕之

共同討議（16時～17時）

懇親会（17時30分～19時30分） 文理学部キャンパス 3号館1F 食堂秋桜

第二日 6月14日（日）

研究発表会（10時～15時10分） A・B2会場

受付 9時30分～（Zoom開場 9時45分～）

A会場 3号館2F3205教室

（10時～12時10分）

疫病とその記憶に関する考察

韓国外国語大学校教員 李 相旻

清少納言像の変遷と〈才女〉言説の行方——『春曙抄』以前以後——

青山学院大学大学院生 内野 晴菜

「朔日の御よそひ」を贈る末摘花——『源氏物語』「末摘花」巻における「今様色」をめぐって——

國學院大學大学院生 楠田 健人

休憩（12時10分～13時30分）

（13時30分～14時55分）

オホクニヌシの国作り説話に於ける国作りと統治の不完全性について

早稲田大学大学院生 太刀川直樹

『万葉集』大伴家持「祈雨歌」に見られる「雨」の機能

香川高等専門学校助教 寺尾穂乃香

B会場 3号館2F 3206教室

(10時～12時10分)

説経節から説教源氏節へ——「さんせう太夫」物を中心に——

中京大学大学院生

佐野みどり

新美南吉「ごんぎつね」における言語／非言語テクストの生成と往還

名古屋大学大学院生

勝倉 明以

——自筆原稿・スパルタノート・挿絵の比べ読みをめぐる——

石川淳作品における「わたし」の購読と売文——空襲後の書物を視座に——

早稲田大学大学院生

倉持 紗季

休憩 (12時10分～13時30分)

(13時30分～14時55分)

空と海のあいだに——中上健次「岬」論——

創学館高等学校非常勤講師

富田陽一郎

中世における形容詞「ハカバカシ」の用字について——『平家物語』諸本を起点として——

広島文教大学教授

橋村 勝明

A会場 3号館2F 3205教室 (15時10分～16時40分)

学会三賞 (全国大学国語国文学会賞／文学・語学賞／研究発表奨励賞) 授与式

総 会

大会運営委員長挨拶

日本大学教授

袴田 光康

閉会の辞

明治大学教授

小野 正弘

第三日 6月15日(月)

文学実地踏査 各自・各グループでお回りください。

※夏季大会期間中の6月13日(土)から15日(月)、日本大学文理学部キャンパス図書館棟1F資料館にて、展示会「並べる比べる——日本語日本文学資料展——」を開催いたします。10時から17時まで開館しております。

全国大学国語国文学会 第一三三回大会

研究発表会 発表要旨

【A会場】

疫病とその記憶に関する考察

韓国外国語大学校教員 李 相旻

本発表の目的は、『続日本紀』の疫病記事および『万葉集』の挽歌を主たる資料とし、古代日本人が疫病という異常事態をいかに認識し、その経験をいかなる文化的・心理的枠組みへと内面化していったのかを究明することにある。

7世紀から9世紀にかけて、大陸交流の活発化に伴い外来病原体の流入が増加し、天平の天然痘大流行（735〜737年）に象徴される大規模な疫病が頻発した。とりわけ外交使節の往来は病原体の媒介経路として機能し、社会全体に甚大な人的被害をもたらした。本研究では、こうした社会的文脈を踏まえ、735年に大宰府で発生し平城京へと波及した天然痘の記録を分析する。特に、貴族社会への伝播においては、飢饉等の要因以上に特定の感染集団との接触が主因であったと推察し、天然痘を拡散させた「クラスター」としての天平八年遣新羅使派遣に着目した。

具体的な分析として、『万葉集』巻一五の遣新羅使節歌群に収められた、非業の死を遂げた雪宅麻呂を悼む挽歌を考察の対象と

する。当時の疫病は「鬼病」と表現されたように、超自然的な崇りとして解釈されていた。しかし、これらの和歌は単なる恐怖の表象に留まらず、個別の死を共同体的な記憶へと昇華させるプロセスを内包している。本研究では、天然痘を「鬼病」という隠喩で捉えた古代人の意識を分析した上で、ポール・リクルールの「物語的自己同一性」という概念を援用し、残された者たちが死者の不在を共同体の「物語」として再構築し、死を受容していく契機を読み解く。

このように死を詠む行為は、悲嘆を生の持続へと転換する文化的実践として再定義できる。以上の検討を通じ、疫病は単なる生物学的災害ではなく、古代日本社会の生死観、共同体意識、宗教的世界観を照射する文化的・哲学的転換点であったことを明らかにしたい。

清少納言像の変遷と〈才女〉言説の行方

——『春曙抄』以前以後——

青山学院大学大学院生 内野 晴菜

本発表は、『枕草子』の作者である清少納言について、その人柄と「才」（漢籍の学識）について言及した様々な言説を研究対象とする。清少納言に関する言説を中古〜現代まで網羅的に比較・分析することで、特に〈才女〉としての清少納言像が形成された背景を明らかにする。従来の研究では、近世以降の〈才女〉清少納言に対する毀誉褒貶の歴史が重点的に議論されてきた。そのう

えて発表者は、近世以降の『枕草子』享受を推進した『春曙抄』の序文に注目し、そこに表れている北村季吟の認識が、清少納言に「才」の觀念を直結させた嚆矢であり、清少納言に関する言説史の転換点を成していることを新たに指摘する。近世以降（すなわち、『春曙抄』以降）の清少納言像は、「香炉峯の雪」章段の逸話とともに伝えられ、「才学」・「才華」等の語で人柄が表現される。一方で、中世期（『春曙抄』以前）の清少納言像を見ると、「才」関連の語との結びつきは希薄であり、「優なり」「やさし」といった語彙で人柄が描かれていることを確認できる。このような清少納言像の差異は、社会的な背景に起因すると考えてよいだろう。その中でも、古典研究に取り組んだ北村季吟が流布させた「才」ある女性としての清少納言像が、後の『枕草子』享受に与えた影響力は多大であったと推定できる。実際に、『春曙抄』以前以後の清少納言像を比較してみると、『春曙抄』以後の作品から漢籍の学識を指す「才」関連の言葉が頻繁に見出される。すなわち、近世期の古注釈書における「才」認識の在り様が、今日までの清少納言像の変遷に寄与しているのだと考えられよう。以上を踏まえると、清少納言の美質を漢籍の「才」に見出した『春曙抄』の言説史上の位置づけを再考することにより、今日の清少納言像の在り様を相対化するとともに、今後も形成され続ける清少納言像と〈才女〉言説の行方を見定めることが可能となるのである。

「朔日の御よそひ」を贈る末摘花

——『源氏物語』「末摘花」巻における「今様色」をめぐって——

國學院大學大学院生 楠田 健人

『源氏物語』「末摘花」巻にて、年の暮れ、光源氏のもとに末摘花から文と衣箱が贈られる。衣箱の中には、元日に着る「朔日の御よそひ」として、「今様色のえゆるすまじく艶なう古めきたる」単衣と直衣が入っていた。それを見た光源氏は、文の端に歌を書き汚して不服を露わにする。

当該場面の「今様色」は、多くの注釈書において、当世風を意味する「今様」との関連から、作中世界における流行色と捉えられてきた。しかし、流行色でありながら「古めきたる」と形容される点や、他の場面では「古代」の装束を着る末摘花が、こうした衣を贈る点は看過できない。また、その色相については、大輔命婦の歌にある「ひととはな衣」から薄紅色とされる一方、いくつかの注釈書は、禁色に近い色相を示す表現として「えゆるすまじく」を捉えており、見解が分かれている。当該場面に描かれる末摘花と光源氏とのあり方をめぐっては、このような色彩表現の実態を明らかにしなくてはならない。

本発表では、「今様色」の成立に関わる問題として、まずは史料の記述から、紅花の深染を制限しようとする三善清行の奏議と、奏議を受けた禁制の施行時期を整理する。続いて、文学作品における用例を精査しながら、「今様色」にみられる時代意識を確認し、当該場面に「今様色」が描かれる特異性を明確にする。その上で、「ゆるす」の語と禁制との関連をふまえて、史料の記述や文学作品

品にあらわれる色彩表現の検討をもとに、紅花を用いた染め色が、禁制下においても色相の多様さを保ち続けていたことを指摘し、末摘花が贈った衣の実態を明らかにする。以上の考察を通して、末摘花が贈る「朔日の御よそひ」の色合いが、光源氏との軋轢を生み出す契機となるとともに、「をこ」の振る舞いを描く「末摘花」巻の方法を担っていることを論じる。

オホクニヌシの国作り説話に於ける国作りと統治の不完全性について

早稲田大学大学院生 太刀川 直樹

『古事記』『日本書紀』の国作り説話は、後に天皇が治める国を作るオホクニヌシの事績を示す記事として、重要な位置を占める。この国作りは、スサノヲの指令に始まり、スクナヒコナの協力に際して別天神の承認を得、十全に為されたとの意見が各注釈書や先行論では主流である。

例えば寺川眞知夫氏は、この国作りはアウトサイダーであるスサノヲの指示により始まる武力的・政治的なものであったとし、スクナヒコナの協力に際して後から別天神の認知を得たとする。

一方でその統治は高天原から見れば秩序を犯すものであり、国譲りには正当性が生じると述べる。オホクニヌシの国作り自体に正当性がある一方、統治は高天原の秩序に反していた為に、天孫への国譲りの要求は必然性を帯び、譲られた国の統治も正当性を持つとの考察である。

然し、この国作りは本当に十全なものであったのか。スサノヲの指令は「兄弟を追ひ払い大国主となり、出雲の山の麓に高い宮殿を建てて住め」との物であり、葦原中国全体の国作りや統治には触れていない。カミムスヒの与える承認は「作堅其國」に関する物であり、登場する神名や描写から農耕地、国土の造成部分であると捉え得る。更に、『古事記』国作り説話の末尾に位置する三諸山の神の説話では、要求された祭祀の描写がないまま終わり、後に崇神天皇が同一とされる神を祭祀して、「知初國之御眞木天皇」と称されることとなる。これは、国作りが「知國」に相応しい水準でなかったことを示している。

即ち、オホクニヌシの国作りは、少なくとも祭祀的・政治的に不完全性を帯びるものであったと言える。本発表では、先述の内容に加え、オホクニヌシの統治が「ウシハク」とされ、天皇の「治・知」と区別されることや、スサノヲの指令の意図について論ずることを通じ、オホクニヌシの国作りが帯びる不完全性と、それにより却って天孫の国譲り要求とその後の統治の正当性が補強される事を論証したい。

『万葉集』大伴家持「祈雨歌」に見られる「雨」の機能

香川高等専門学校助教 寺尾 穂乃香

本発表では、大伴家持の「祈雨歌」における「雨」に着目し、その機能を検討する。『万葉集』には、「春雨」「長雨」「村雨」など様々な雨に関する語があるが、その中で、当該歌には「雨」が

詠まれる。今回は、「雨」と「春雨」「しぐれ」との比較から、「雨」特有の機能の有無を検討する。

当該歌は、越中国の国守であった大伴家持が、早で弱った田畑への降雨を願って詠んだ歌である。四一二・四一三番歌では、萎びた作物への嘆きと雨の希求、願いが叶った四一四番歌では、豊穰への予祝が詠まれている。ここでの「雨」は、田畑の作物の生長を促し、土地に恵みをもたらすものとして詠まれている。

『日本書紀』には、降雨によって豊穰がもたらされた時に、百鬼が天皇の徳を称える記事が見られるが、早による作物の生育不良という国家の危機に対して、それを救う形で降る雨は、統治者である天皇の徳の高さと結びつけられるものであった。先行研究では、大伴家持の詠出動機に議論が集中し、そこで見出される「雨」と統治者の徳との結びつきは、雨全体の機能と考えられてきた。

しかし、当該歌における「雨」と同様に、植物に影響を与える雨の語である「春雨」「しぐれ」と比較すると、その対象には違いが見られる。植物に影響を与える場合には、(1)生長と(2)衰退の二つがあるが、「春雨」「しぐれ」は、(1)(2)の両方で、「桜」や「黄葉」といった同じ対象に影響を与える。それに対して「雨」は、(1)では田畑の作物、(2)では「なでしこ」や「雪」のように、場合によって影響を与える対象が異なる。加えて、田畑の作物と結びつくのは「雨」のみである。つまり、田畑の作物との結びつきは「雨」特有のものであり、ここでは実りをもたらす利点が強調されていると言える。

以上のことから、大伴家持の「祈雨歌」における「雨」は、田畑の作物の生長を促し、土地に恵みをもたらすものであり、これは「雨」特有の機能であると結論づける。

【B会場】

説経節から説教源氏節へ

——「さんせう太夫」物を中心に——

中京大学大学院生 佐野 みどり

説経節は江戸前期から中期に流行した芸能であるが、人気を博した浄瑠璃に押され、いつしか姿を消していった。しかし近年、説教源氏節という芸能において、説経節で語られたのと殆ど同じ内容が語られていることが分かった。

喜多村信節の随筆『嬉遊笑覧』によると、説経節を復活させたのは、薩摩若太夫である。彼は江戸中期の説経に題材をとって「さんせう太夫」「小栗判官照手姫」等の物語を、薩摩派説経節として新たに創出した。これを利用したのが、新内節を語っていた岡本美根太夫である。彼の一派は説教源氏節を名乗るようになり、かなりの隆盛をみたが、現在説教源氏節は、名古屋近郊のあま市、甚目寺地区と広島県廿日市市にのみ残っている。その正本の中に、「さんせう太夫」物が十種ほどある。始めに、江戸中期の説経節と薩摩若太夫正本とのつながりについて、『説経正本集第一』所収の説経節正本と薩摩若太夫正本「三庄太夫」を用い、粗筋、登場人物名を中心に比べた。その結果、薩摩若太夫が薩摩派説経節創出に利用した正本は、佐渡七太夫正本「山庄太輔」正徳三年版か、それに近い本文を持つものであることがわかった。次に薩摩若太夫正本と説教源氏節正本の関係を検討すると、薩摩若太夫正本には、説教源氏節正本の内容と対応する段が必ずある。両者に

は共通して使われている詞章が数多くあるので、薩摩若太夫正本を参照して説教源氏節正本が作られたことが判明した。

本発表では、「さんせう太夫」物を題材として、説経節から説教源氏節へ、薩摩若太夫正本を仲立ちとして物語が受け継がれていることを報告する。さらに時間が許せば、三者のつながりが「さんせう太夫」物だけではないことを、「小栗判官」物を用いて検証したい。

新美南吉「ごんぎつね」における言語／非言語テキストの生成と往還

——自筆原稿・スパルタノート・挿絵の比べ読みをめぐって——

名古屋大学大学院生 勝倉 明以

本発表では、新美南吉「ごんぎつね」の改稿過程と、複数テキストの異同に焦点を当てて論じる。その上で、小学校の国語科の共通教材という性質に着目し、言語／非言語テキストの比べ読みの意義と効果を検討することを目的とする。

「ごんぎつね」は、スパルタノート版と初出の『赤い鳥』版という異なる言語テキストが存在する。現在は鈴木三重吉が添削した『赤い鳥』版が「決定稿」として扱われているが、それ以前に書かれたスパルタノート版の「権狐」も見落とせない。なぜなら、両テキストには多数の差異が存在するからである。異同箇所は多岐に渡るが、特筆すべきは、書き出しの前書きが短くなっていることや、方言を用いてなされていた表現に代表される地域性の排

除、そして、ごんの心情を語る上で見逃せない結末の改稿である。スパルタノート版では「うれしくなりました。」と心情が明示される一方、『赤い鳥』版では「うなづきました。」と改稿され、心情は描かれない。とはいえ、このような結末の改稿は、新美南吉文学では珍しいと言ひ難い。なぜなら、光村図書四年生の国語科教科書に副教材として採録されている代表作「手袋を買いに」でも同様の改稿がなされているからである。

このような新美南吉文学の性質を踏まえると、一次資料の読解を踏まえた比べ読み学習の可能性の検討が必要だと考えられる。また、非言語テキストである「ごんぎつね」の挿絵は、初出版と教科書版を比較すると、こちらも結末部の描かれ方が異なる。このような言語／非言語テキストにおける一次資料と「決定稿」の異同に着目することで、言語テキストの読解に困難を抱える子ども達の支援と、複数の資料を読み取り、目的に応じて必要な情報を取捨選択する力を身に付けさせる学習が可能になると考える。この二点をねらいとした比べ読みの意義の検討を通して、物語の生成過程の読解に伴う一次資料の教材としての有効性を明らかにする。

石川淳作品における「わたし」の購読と売文

——空襲後の書物を視座に——

早稲田大学大学院生 倉持 紗季

本発表では、石川淳が一九四〇年代に発表した一人称小説を取

り上げ、同時代における書物をめぐる環境を視座に、古典籍の購読と自身の売文業を語る作中の「わたし」の造形を分析する。

石川は一九四〇年代、「雪のはて」(『文学界』一九四二・七)や「黄金伝説」(『新潮』一九四六・三)、「焼跡のイエス」(『新潮』一九四六・一〇)などの一人称小説を集中的に発表する。作中の「わたし」の多くは、明治以降の書物を忌避して古典籍を購読するか、自身の仕事を売文業と称する人物となっている。この傾向は四〇年代の小説に顕著なもので、五〇年代以降の三人称小説ではその傾向を弱める。従来の研究において、このような変化は同時代の政治的、社会的体制の変動との影響関係から注目されて来た。しかし、一人称の語りと共に手放される購読と売文の表現も、同時代社会とのつながりを考える上で注目に値する。

本発表ではまず、購読と売文を語る「わたし」が、空襲によって蔵書を焼失していることに照明を当てる。こうした姿は石川自身の体験と重なり合うに留まらず、石川以外の同時代の文学者にも広く共有される経験であったことを明らかにする。その上で、焼け残った書物を売り物として扱う同時代の古書業界にも目を向け、書物の焼失が同時代の文学に与えた影響を分析する。次に、石川の小説内の「わたし」が求める書物の様相を整理し、戦後の古書業界や読者に対して「わたし」がどのような態度を向けているのかを検討する。そして、「わたし」が自身の文業を「売文」と捉える自己卑下は、古典籍の価値を理解し購読する資質を有するが故に現れた表現であることに考察を付す。最後に、戦前に発表された「佳人」(『作品』一九三五・五)や「普賢」(『作品』一九三六・六・八)にも「わたし」の「売文」意識が現れているため、これらの作品との比較も試み、石川が描く「わたし」と書物

の関わりに新たな解釈を提示したい。

空と海のあいだに

——中上健次「岬」論——

創学館高等学校非常勤講師 富田 陽一郎

先行研究を概観し、池内輝雄やユン・フンキルの、岬が男性器の比喩、湾が女性器の比喩、岬が湾に突き刺さっているという、男性原理と女性原理の相克がこの作品の主題であるとする読みは、象徴から記号的に読み解く弊害を持つていると考えている。安岡真のように、民俗学的な説話構造からこの作品を読み解く試みや、李鐘旭のように、混沌とした世界の象徴として、「路地」と呼ばれる被差別部落の文化や世界、入り組んだ男女関係や複雑な家族関係を読み解くといった見解は部分的には妥当であるが、全てを言い表してはいないという見解である。

高澤秀次、守安敏司、明石福子、渡邊英理、渡部直巳、今井亮一、柄谷行人らは、この前者と同じ解釈がほとんどで、あえて言及する部分が発見できた場合は発表時に補足する予定である。

富岡幸一郎、川合智、中山昭彦、柴田勝二、若松司、垣内健吾、栗坪良樹、早川芳恵、浅野麗らの「岬」への見解は、それぞれの研究者の独自の解釈という側面が多く、それぞれの研究テーマとしては興味深い。先行研究史の一般的な流れからは少し外れると思われる部分も多く、今回は詳細に取り上げることが割愛させて頂く。

発表者の見解は、不条理な土地である路地の、不思議な家（土方の家族／一族）に生い育った作家が、いったん新宮の土地から離れて上京し、東京という根無し草の共同体に至った時、いわば文学の素材として自分の故郷を眺め直した時、路地世界を小説として描くことを決意すると同時に、そこに精神的に帰っていく、つまり気持ちの上での一種のピクニックのような精神的帰郷を志し、また小説を書くという、ある種の賛美歌にして鎮魂歌を歌い出した端緒ともなり、女性との性行為など、いわば成人式とも呼ぶべき一種の通過儀礼でもあったという見解である。つまり「岬」は、水平線のように、芥川賞受賞という人生の画期となった作品であるとの解釈が、発表者の解釈である。

中世における形容詞「ハカバカシ」の用字について

——『平家物語』諸本を起点として——

広島文教大学教授 橋村 勝明

形容詞「ハカバカシ」は寛一本系高野本『平家物語』において仮名表記される語である。一方で同じ語り本系である百二十句本系斯道文庫本『平家物語』では、漢字表記「分軍」「軍分」としている。斯道文庫本の用字は形容詞「ハカバカシ」の語義との関係を直ちには説明できない。このような用字がなされる背景について、『平家物語』諸本における「ハカバカシ」の表記を確認し、さらに『平家物語』を起点として「ハカバカシ」の用字について検討をする。

『平家物語』諸本のうち、漢字平仮名交じり表記文では専ら仮名表記「はかばかし」が用いられること、漢字片仮名交じり表記文では屋代本のみ片仮名表記とされていること、また「分軍」「軍分」の用字に加えて竹柏園本に「墓々」がみられること、そして漢字表記文では平松家本が漢字片仮名交じり表記と同じ「軍分」を用いているほか、熱田本では他本にみられない用字をしていることがわかった。

『平家物語』以外の資料については、『今昔物語集』には「ハカバカシ」がみられるが、その全ての用例が漢字表記「墓々」である。中世の古辞書においては管見の限りは見出し項目の存しない語である。但し、「ハカバカシ」と同根の「ハカナシ」は古本『節用集』では「墓無」「无墓」として掲載されている。近世以降は、『書言字考節用集』において「ハカ」に「果敢」を宛て、「果敢取」（ハカドル）の用字がみられ、『北越軍談』では「果敢々々」（ハカバカシ）がみられる。

右の検討の結果、中世の「ハカバカシ」の用字は、中古において漢字との結びつきが極めて希薄な語を漢字化しなければならなかった結果とみてとれる。これは、漢字仮名交じり表記文の成立によるもので、特に表語性の観点から漢字片仮名交じり表記文において生じてくる問題であった。漢字平仮名交じり表記文では中古と同じく連綿による仮名表記が可能であるために宛字による漢字化が回避できたのである。

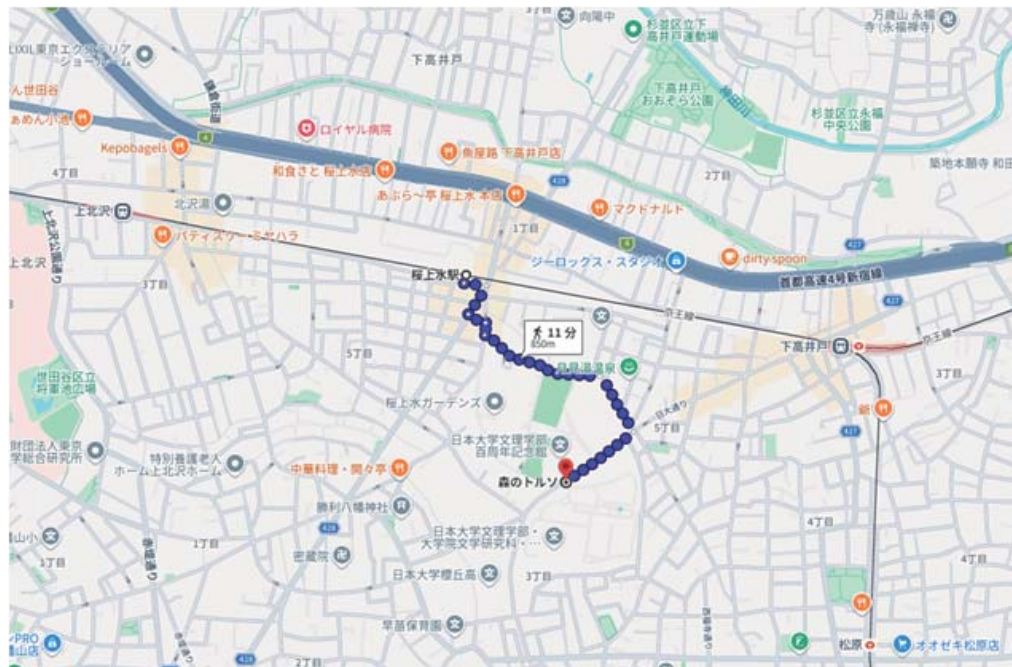
○アクセス

<https://chs.nihon-u.ac.jp/about/access/>

京王線・東急世田谷線 下高井戸駅 下車 徒歩8分（新宿・渋谷から10～12分）
下高井戸駅（最も分かりやすい道順）日大通りをまっすぐ 8分 650m

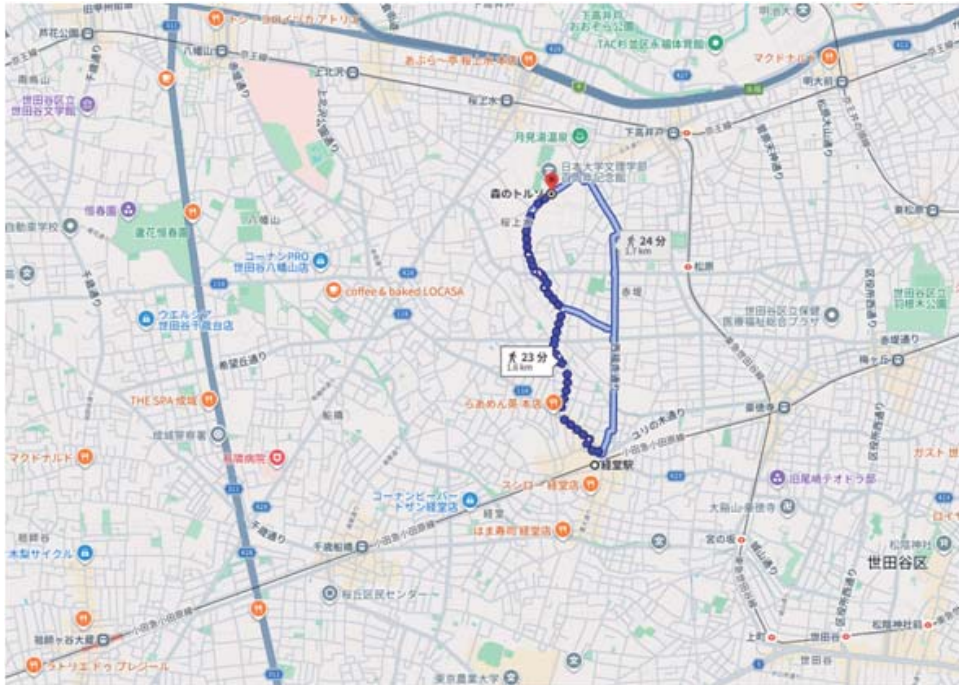


京王線 桜上水駅（急行停車駅）下車 徒歩8～10分（新宿・渋谷から10～12分）
桜上水駅 南口から（途中に近道の看板があります）9分 750m



小田急線 経堂駅下車 徒歩 20～25分（新宿・渋谷から13～17分）

経堂駅 北口から（途中、分かりにくい箇所があるため、時間に余裕をもって
お越しください）1.6km



Campus Map for College of Humanities and Sciences

日本大学文理学部 キャンパスマップ

所在地：東京都世田谷区程上木3-25-40
TEL：03-5317-9677(国際課)
Website：https://www.chs.nihon-u.ac.jp

● 施設等	
入学センター	1号館 1F
就職サポートセンター	1号館 1F
教職センター	1号館 2F
グローバル教育研究センター	3号館 2F
コンピュータセンター	図書館 3F
百年記念館	1F
国際学生会館	2F
オーバル・ホール	図書館 3F
センターホール	本館 B1F
アカデミックコモンズ	本館 1F
ラーニングコモンズ	本館 1F
ラーニングホール	3号館 1F
資料館・図書館	図書館 1F

● 学科学部		
哲学科	2号館	11F
史学科	2号館	8F
国文学科	7号館	4F
中国語・中国文学科	7号館	1F
英文文学科	7号館	3F
ドイツ文学科	2号館	7F
社会学科	本館	4F
教育学科	本館	3F
体育学科	総合体育館	2F
心理学科	本館	3F
地理学科	8号館A棟	4F
地球科学科	8号館A棟	3F
数学科	本館	5F
情報科学科	8号館B棟	2F
物理学科	8号館B棟	1F
生命科学科	本館	5F
化学科	本館	5F
総合文化研究室	2号館	7F

● 事務課	
庶務課	本館 2F
教務課	本館 1F
会計課	本館 1F
学生課	本館 1F
教職課	本館 1F
図書館事務課	図書館 1F
研究課	1号館 1F
就職指導課	1号館 1F
体育課	総合体育館 1F
講義室	本館 2F

<https://chs.nihon-u.ac.jp/about/campus/>

- ・キャンパス内のコンビニや学生食堂は、日曜日、営業していません。
お食事は大学周辺のお店やコンビニをご利用ください。